様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００４７５

研究課題名（和文）シレジア文学のトランジット性についての研究

研究課題名（英文）Study on the Literary Representation of Silesia as a Transferential Space

研究代表者
井上　暁子（INOUE, Satoko）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授

研究者番号：２０５９９４６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：シレジアは中世以来、複数の異なる民族、文化、言語が共存し、もの、人、思想、イメージの行き交う空間であった。19世紀から20世紀の、移動の多様化、情報ネットワークの発達、大衆文化の普及を背景とする近代化は、ドイツ語ないしポーランド語によるシレジアの文学表象に影響を与えた。移民文学についての研究（2022）で、シレジアを含む境界領域の現実空間に残された人・場所・ものをめぐるミクロヒストリーが、トランジット性の痕跡を露呈していること、また、文学においてシレジアは多層的で錯綜した空間として表象されていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　単書『語りの断層――ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学』(2022)で、シレジア出身のドイツ語作家を含む移民による文学創作、および文化活動について論じた。彼らの故郷であるドイツ＝ポーランド国境地帯は、多層的かつ錯綜したトランジット空間として表象されており、「血と大地」や社会主義リアリズムといったイデオロギーの影響下にあった伝統的なシレジア文学の、定住者中心主義とは異なる描かれ方をしている。移民文学は国別・言語別に研究されることが多く、本研究のように国境地帯の文学として論じた研究は世界的にもまれである。

研究成果の概要（英文）：Silesia is a region, where since the Middle Ages, various ethnicities, cultures and languages have coexisted. This area has witnessed the movement of people and the exchange of diverse materials, ideas, and images. From the 19th to the 20th century, increased mobility, advanced information networks, and the expansion of popular culture significantly influenced the representation of Silesia in German and Polish literature. The modernization process had a substantial impact on these representations.
 A publication on migrant literature, released in 2022, and the Japanese translation of Pawel Huelle's novel, "Weiser Dawidek", published in 2021, highlighted that the micro-histories of people, places, and materials within the borderlands, including Silesia, reveal the region's transferential character. The micro-histories illustrate: Silesia as a multi-layered and intricate microcosm, with its literary texts interwoven with numerous small-scale narratives.

研究分野：文学研究

キーワード：トランジット性　移民　空間表象　流通　移動　国境地帯　ミクロヒストリー　想起

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

シレジアは中世以来、多民族・多言語・多文化地域だったが、20 世紀、伝統的な多言語・多文化社会は完全に崩壊した。シレジア研究は、数少ない例外を除いて、もっぱら国別・言語別に行われてきた。ポーランド文学研究においても、遅ればせながらやってきた国民国家の成立以後、民族対立の舞台となったシレジアについては、（ポーランド）国家・民族主義との接近や離反を繰り返しながら発展した「地域主義」の文脈で語られることが多い。第二次世界大戦後の社会主義リアリズム文学も、シレジアを住民の追放・引き揚げ・在留が同時並行で起こった「緊張の土地」として、あるいは、社会主義の実践の舞台として表象した。そうした伝統的なシレジア表象に変化が訪れたのは、オルガ・トカルチュクの登場をきっかけとする。社会主義時代の中央集権的なイデオロギーに基づく均質的なポーランド国文学史記述を脱構築する動きに後押しされ、1990 年代のポーランドの北部・西部国境地帯では、辺境地域に残された異民族・異文化・異言語の残響に耳を傾ける、「小さな祖国（プライベート・ホームランド）の文学」というジャンルが流行した。1960 年代生まれの多くの作家がこのジャンルのコンセプトに共鳴し、自分たちが生まれる前に存在した多言語世界の残響を、今日的視座から書き起こす作品を書いた。

しかし、トカルチュクの、シレジア（もしくはシレジアを思わせる土地）を舞台とする作品（『昼の家、夜の家』『プラヴィエク村とそのほかの時代』）は、必ずしも「小さな祖国」ブームに収まらない視野とテーマ性をもっている。それは、「リキッド・モダニティ」としての現代世界の諸相を、シレジアの「流動的アイデンティティ」と結びつける。類似の例に、グダンスク（旧ドイツ領ダンツイヒ）の作家パヴェウ・ヒュレがいる。ヒュレの処女作『ヴァイゼル・ダヴィデク』はグダンスクを舞台にしているが、『カストルプ』や短編集『冷たい海の物語』などは、バルト海沿岸一帯をトランジット空間として描いている。そこに一貫してみられるのは、土地を「再録羊皮紙（パランプセスト）」として描く手法である。

２．研究の目的

本研究の目的は、シレジアを行き交う人々がこの地に注いだまなざしや、シレジア・イメージの流通および変容に着目することで、シレジアのトランジット性を複眼的、多層的に捉え直すことであった。コロナ禍の影響で渡航が困難になったため、研究対象をシレジアに限定せず、ドイツ＝ポーランド国境地帯全体に広げ、西ドイツへ渡ったポーランド移民の文学を例に、地域のトランジット性が文学にいかに表象されるかという問いを追うことにした（移民文学を国境地帯の文学の一つとして論じるというのは、当初の研究計画から変わらない、一貫した姿勢である）。さらに、パヴェウ・ヒュレの処女作『ヴァイゼル・ダヴィデク』を翻訳し、「再録羊皮紙」として地域を描く手法を具体的に示すことにした。

とはいえ、現代ポーランド文学を代表するヒュレの文学と、移民作家の文学とでは、特性や質がかなり異なり、単純な比較はきわめて困難である。そこで「（シレジアを含む）国境地帯はどう描きうるか」という問いをたて、各作家のテーマや手法よりも、「多元的地域を描くナラティヴ」を関心の対象とした。そうすることで、本研究課題は、歴史記憶、オーラル・ヒストリー、ミクロヒストリーとも接点を持つことになった。

３．研究の方法

当初の研究計画では、１）シレジアを行き交う人々によって書かれた多言語的な「移動文学」の系譜をまとめ直し、２）シレジアをめぐる移動の目的や種類の多様化、情報ネットワ

ークの発達、大衆文化の普及との関係を整理し、3）シレジアに注がれる多様なまなざしが作り上げたイメージが国際的に流通する中でどう変容するかを示し、4）「流動的アイデンティティ」の研究につなげる、としていた。オルガ・トカルチュクやパヴェウ・ヒュレのような、世界文学に数えられる大作家の創作にのみ焦点をあてるのではなく、地域同士、テクスト同士の関係に留意して、段階的かつミニマムに開いていくことをめざした。

しかし、パンデミックの影響で、研究計画を修正し、博士論文を研究書にまとめ直すにあたり、研究対象の特性や質の違いに留意して、方法論も以下のように修正した。

1）社会主義体制末期からポーランドが欧州連合に加盟した 2004 年までに、シレジアを含むドイツ＝ポーランド国境地帯で起こった移住の目的や種類の多様性を、当該地域出身の 5 人の移民作家を例に明らかにし、2）彼らの文学における「境界」の描かれ方を分析し、3）ドイツ＝ポーランド国境地帯の同世代の作家たちによる「小さな祖国」文学のブームに加わることができない移民作家の、創作における戦略的な戦いぶりを示し、4）上記の時代に西ドイツへ移住したポーランド人の文化活動を例に、移民のアイデンティティに国境地帯の流動性が大きく関与していることを明らかにする。

4．研究成果

科研費を獲得したものの初年度より渡航が不可能になり、もともと予定していた資料収集が思うようにできなかった。網羅的な資料収集には程遠いが、17 世紀から 20 世紀にかけてシレジアを出入りした旅行者や巡礼者によって書かれたルポルタージュを中心に読み、シレジア・イメージが、ポーランド建国という時代の要請にかなり影響を受けている、と感じた。ポーランド分割時代に書かれた旅行記では、ロシア帝国領やオーストリア・ハンガリー帝国領だった地域からの旅行者がシレジアの後進性に驚いていることが多いが、17 世紀シレジア出身のイタリア巡礼者のルポルタージュでは、シレジアが世界の他地域との比較の視点から描かれており、それは現在の「再録羊皮紙」に通じる地域表象であることが分かった。

現代ポーランド文学を代表する作家パヴェウ・ヒュレの長編『ヴァイゼル・ダヴィデク』を翻訳し、「あとがき」で、本作が単に、少年時代を過ごしたグダンスクをなつかしむ物語ではなく、グダンスクを「再録羊皮紙」として描く、「想起」をテーマにした物語であることを指摘した。しかも、ポーランドの公的言説においては抑圧されてきた、西ドイツへの移民が主要なキャラクターとして登場しており、ポーランドからドイツにまたがる地域が、一種のトランジット空間として描かれているという点も指摘した。

さらに、移民文学研究として、『語りの断層―ドイツ＝ポーランド国境地帯の文学』（九州大学出版会、2022）を上梓した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 井上暁子
２．発表標題 「国境地帯の文学の挑戦――ずれを抱え込む空間からずれを引き起こす空間へ」
３．学会等名 日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会合同シンポジウム「記憶と想像の中の祖国・歴史・越境―ロシア・東欧における文化と変容」
４．発表年 2021年

１．発表者名 井上暁子
２．発表標題 合評会２：パヴェウ・ヒュレ『ヴァイゼル・ダヴィデク』
３．学会等名 東欧史研究会・第3回例会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 井上暁子	４．発行年 2022年
２．出版社 九州大学出版会	５．総ページ数 331
３．書名 『語りの断層――ドイツ=ポーランド国境地帯の文学』	

１．著者名 井上暁子	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 432
３．書名 『ポーランドの歴史を知るための55章』	

１．著者名 パヴェウ・ヒュレ（井上暁子訳）	４．発行年 2021年
２．出版社 松籟社	５．総ページ数 351
３．書名 『ヴァイゼル・ダヴィデク』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関